

## Joseph Andrews の側から見た *Pamela*

雲 島 悦 郎

S. Richardson 作 *Pamela* (1740) のパロディである *Shamela* (1741) が H. Fielding の作品だというのは、今ではすっかり定説になっている。<sup>1)</sup> しかし、この作品が出た当時、作者が誰か分ろうと分るまいと、*Pamela* に好ましからざる向きを感じとっていた読者の多くにとって、*Shamela* はきっと痛快きわまりない作品であったに違いない。だが果して、あの Tickletext (*Shamela* の出だしの部分で Parson Oliver に対し *Pamela* を強く推奨するけれど、同じその *Shamela* の終りの部分では、*Pamela* への評価を一変させる人物) のような読者を数多く得たかどうかとなると、大いに疑問である。<sup>2)</sup>

大体 *Shamela* は、その着想において必ずしも original だとは言えない。この作品における、*Pamela* に対する主だった批判点のいくつかは、*Pamela* 自体の中で既に十分意識されている。<sup>3)</sup> 例えば、Mr. B. の “I know her now, and see she is for any fool’s turn, that will be caught by her.” (p. 192)<sup>4)</sup> という言葉には、*Pamela* は愚かな男を手玉にとる性悪女だという発想があるし、Lady Davers の Mr. B. に対する、“... I had rather have called you *knave* than *fool*.” (p. 446) という言葉には、Mr. B. が結局その種の愚か者、即ち booby だという捉え方がある。また、Mr. B. が *Pamela* の再婚を仮定してする話の中で、“... as if she had married a man for his *estate*, when she had rather have had *another*, had it not been for *that*; and that now, the world will say, she is at liberty

to pursue her inclination, the parson is the man!" (p. 525) と言う時、そこには Shamela と Williams を不貞の関係におくことにつながる発想がある。

*Pamela* は、その大部分が、*Pamela* という小間使が親に宛てた手紙を編集者がまとめたものからなるという設定のもとに書かれているが、この設定の隙をついた *Shamela* は、*Pamela* をうまく歪め、その欠点を誇張して面白く見せるという点で、<sup>5)</sup> パロディとしては確かに成功している。しかし、*Pamela* のまともな批評としては過大評価すべきではない。というのも、*Shamela* は、*Pamela* (即ち *Shamela*) を“young politician”と捉え、彼女の偽善性を攻撃することに重点をおくけれど、*Pamela* の本質的な問題点をもっと別の所にあると思われるからである。<sup>6)</sup> そこで、本論では、よりまともな *Pamela* の批判になっていると思われる *Joseph Andrews* (1742) の観点から、*Pamela* の問題点と覚しきものをいくつか取りあげて見ることにする。

*Pamela* の前半部は、価値の転倒した逆様の世界を描いていて、それなりに面白い。*Pamela* の誘惑者 Mr. B. は、彼女に Lucifer の手先、又は Lucifer そのものの如く恐れられている。彼女には、彼の価値観は全く逆様のようにはしか見えない。例えば、彼女は次のように言う。

It is true he promises honour, and all that; but the honour of the wicked is disgrace and shame to the virtuous: And he may think he keeps his promises, according to the notions he may allow himself to hold; and yet, according to mine and every good body's, basely ruin me. (pp. 126—27)

Mr. B. は悪魔の如く彼女を誘惑して、彼女を試めすけれど、この“trial”には裁きの意味も含まれる。<sup>7)</sup> そして、本来裁かれるべき立場の Mr. B. が平然と裁く側に立ち、罪なき者が罪人の如く彼の前で震えおののかなければならぬあべこべの状況を、彼女は苛立ちとともに次のように語る。

O how can wicked men seem so steady and untouched with such black hearts, while poor innocents stand like malefactors before them! (p. 28)

Why should the guiltless tremble so, when the guilty can possess their minds in peace? (p. 191)

... I have a strange tribunal to plead before. The poor sheep in the fable had such an one; when it was tried before the vulture, on the accusation of the wolf! (p. 194)

裁く筋合いのない者から、正当な裁きを期待できるはずもない。Pamela は、こんな裁きは断固拒否すべきであるにもかかわらず、この法廷で色々と弁明に努める。それは、Mr. B. の“trial”にはもう一つ試験の意味も含まれており、その試験に通りたい彼女は、彼の質問に答えない訳にはいかないのである。その結果、彼女は、まとまったお金で、Mr. B. の一時的な慰み物になったり、更に有利な条件で長期的な愛人の座についたりするような安っぽい女ではないことが判明し、よって試験に見事合格して正妻の座を射止めることになる。

Mr. B. が Pamela との結婚を決意し、彼女が彼の言葉を信じ、結婚を承諾すると、途端に作品世界は一変する。それは無論第一に彼女にとって世界が一変したからであり、これを象徴するのが彼女の発する“... oh! my prison is become my palace; and no wonder every thing wears another face!” (p. 369) という言葉である。彼女は以前の願いととは反対に、この牢獄から逃亡しなかったことを神に感謝せずにはいられないし (p. 395)、再逆転が起きないように、“... for God's sake let me have no more trials and reverses ...!” (p. 273) と願うのである。

我々が Pamela の手紙を通じて知ることは、あくまでも彼女の立場から眺めたもので、客観的事実とは限らないと解釈すれば、ある程度このような変化は納得がいく。しかし、彼女が見誤っていたとは思われない辺りでの急変は、

作品のリアリズムや詩的正義を損うと同時に、作者自身の価値観や倫理観を怪しく見せているとしか思われぬ。それに、逆様の世界によって打ち出されていたせっかくの諷刺性がこれによって台なしにされてしまうのも、Fielding の作品になじんだ者には残念である。

最もはなはだしい逆転現象を起こすのが Mr. B. である。Lucifer の如き相貌を呈していた彼が、突如天使と見まごう程になり、Pamela の “innocence” の侵害者から保護者へ、そして彼女の迫害者から恩恵を施す人物に変ずるのである。しかし、彼女が余程の虚言家でもない限り、彼は確かに悪辣な行いをしたはずなのに、その責任の追及が何らなされないまま、  
 “... thus the dear, once naughty assailer of [my] innocence, by a blessed turn of Providence, is become the kind, the generous protector and rewarder of it. God be evermore blessed and praised!” (p. 364)  
 と、ただただ Pamela の神への感謝の言葉が献げられる。そして、彼女の甘さは、Mr. B. が改心する以前の彼女の言葉、“... what an angel would he be in my eyes yet, if he would cease his attempts, and reform!” (p. 187) に予示されている。

この甘さは、一つには彼女の、ひいては作者自身の極端な結果主義に由来する。彼女は次のように言っている。

... when I see that my happiness is brought about by the very means that I thought then my greatest grievance, I ought to bless those means, and forgive all that was disagreeable to me at the same time, for the great good that hath issued from it. (p. 317)

しかし、Mr. B. が Pamela に加えた迫害の性格は、終り良ければ全て良しといった喜劇的なものではないはずである。<sup>8)</sup> その点、Fielding はこの種の問題をもって掘り下げて考えていたと思われる。

さっきの寛大さは、更に Mr. B. の過ちは、親に甘やかされて育ったために感情が制御できなくなったせいだと、本人も Pamela も意識している

ことによる。全ては家庭教育が間違っていたからだとして、責任転嫁が行われ、Mr. B. は免罪される。Richardson は、Fielding 同様、教育に相当の関心を示しているが、まだ突きつめ方が足りないように思われる。

Mr. B. は免罪されるだけでなく、Pamela に関すること以外ではなかなか善良な人間であったとしきりに弁解してもらおう。例えば、彼の姉の Lady Davers の彼に対する評価などは、誘惑者のイメージとはおよそ懸け離れている。そして、その線に沿って、Pamela の“My good dear master, my kind friend, my generous benefactor, my worthy protector, and, oh! all the good words in one, my affectionate husband, that is soon to be . . .” (p. 358) という言葉通り、Mr. B. は結婚すると直ちに理想的な夫になり、更には、“Thou hast done wonders in a little time; thou hast not only made a rake a husband; but thou hast made a rake a preacher!” (p. 449) と Lady Davers を賛嘆させるように、彼は Pamela に対して、上流階級の家庭婦人の心得を説く程に変身する。彼は、上流階級の結婚は地位・財産・便宜が第一で、愛情は二の次である上に、お互いに甘やかされた者同士が一緒になりがちなので、うまく行くはずがないと考えていたから、結婚には疑問を感じ、それ故に結婚を嫌っていた。しかし、上流出身者以上に才能にも恵まれ、その上気立てもよい下層階級出身<sup>9)</sup>の Pamelaこそ自分の理想の妻になる人だと悟って彼女と結婚する。そして、Pamela の方も、それまでの迫害が嘘だったように、ひたすら玉の輿に乗ったことを感謝し、すんなりと新しい環境にとけ込んでいく。この辺りの安易さがこの作品の大いに気になる欠点である。<sup>10)</sup>

Richardson は、*Pamela* の表題紙にもあるように、Fielding と同様、文学の効用として entertainment と instruction を考えていた。<sup>11)</sup> その instruction とは、作中人物を読者にとっての example と見なして、読者にあるべき生き方を示すことであると考えられている。そして、Richardson が上記のような物語から読者が大いに得る所があると考えていたからこそ、益々 Fielding はこれに反発せずにはいられなかったのである。そして、そ

の一つが *Shamela* となってあらわれるが、これは前にも述べたように決してまともな批評にはなっていない。そもそも、Mr. B. はただの愚か者（実の名が Booby）ということで済まされている。しかし公平に見て、*Pamela* の中で最も非難さるべき人物は、*Pamela* よりも Mr. B. である。<sup>12)</sup>

Fielding は、彼自身のちに治安判事になるけれど、作品の中で一貫して、無能であったり、腐敗、墮落した治安判事達に鋭い批判の鋒先を向けている。その彼の立場から Mr. B. を見るとどうなるだろうか。作品の中で、Mr. B. が公式に裁きを行う場面はないけれど、しかし紛れもなく彼は治安判事の職にある。そういう社会的な立場にある彼が、母親が亡くなると、かねてから目をつけていた小間使の *Pamela* を猛然と誘惑しにかかる。そして、馬丁の John を使って彼女の両親宛ての手紙を盗み読みしたり、あの手この手の卑劣な手段を用いて、*Pamela* を我が物にしようと画策するが、これがやがて召使いに知れると、今度は *Pamela* に解雇を言い渡し、彼女を親元に送り届けると欺いて、Lincolnshire にある自分の別邸に人を使って拉致し、Jewkes という質の悪い女中頭や Colbrand という得体の知れないスイス人を彼女の監視役につかせ、迫害を続ける。このように、手先を使って女性をものにしようとする男は、Fielding の作品では、*Amelia* の中に the noble lord と呼ばれる貴族がいるし、*JA* では数人の取り巻き連をつかって、白昼堂々と Joseph や Adams の元から、一度は Fanny を強引に連れ去ることに成功する地主がいる。そして Fielding にとって、この種の男は徹底的に弾劾されるべき対象以外の何ものでもない。この点では、面白いことに、*Pamela* も同じような認識を持っており、次のように言っている。

... evil examples, in superiors, are doubly pernicious, and doubly culpable, because such persons are bad *themselves*, and not only do no good, but much *harm* to others; and the condemnation of such must, to be sure, be so much the greater! (pp.399—400)

にもかかわらず不思議なことに、Mr. B. は断罪を一切免れるのである。それどころか反対に、彼は召使いの罪を許し、復職を認めてやる寛大な主人のように描かれる。

Mr. B. の屋敷に使われる執事の Longman, 召使頭の Jonathan, そして女中頭の Jervis は、皆 Pamela を愛しており、Mr. B. の計略を知ると、Pamela を守るために、その事実を Mr. B. の姉 Lady Davers に通報するが、そのため主人の勘気を蒙り解雇される。後になって彼等は、Pamela の取りなして復職を許されることになるが、当然の正しい行いをした彼等が、非を認めた形で戻ることになる。また、牧師の Williams は、Pamela の頼みで彼女の救出に奔走するが、それが発覚すると、Mr. B. への借金を理由に投獄される。だが結局彼も許されて、予定通り Mr. B. から空きになった聖職禄を授けられるが、彼は、治安判事の職務を忘れた Mr. B. から、聖職者としての職務を忘れ、面と向って Mr. B. を諫めるべきところを、非常手段を取ったと小言を言われ、なさない弁解をしなければならぬ。聖職者と言えば、この Williams を時々代理に使っている Peters という教区牧師がいるが、彼は Williams から Pamela の救出の相談を持ちかけられると、それに手を貸すどころか、Williams の世間知らずをたしなめ、長いものにはまかれろ式の処世訓を垂れる始末である。この話を聞くと、あれ程教会に行きたがっていた Pamela も、最早そこに行くのは無意味と悟る程である。Williams の行動とて全然問題がない訳ではない。彼は、明らかに Pamela に気があり、それゆえ彼女を助けようとする動機がやや不純である。だから彼は、Pamela が Mr. B. から逃れる非常手段として、自分と結婚するよう持ちかけたり、Mr. B. が二人の結婚を許可したという Jewkes の作り話にまんまとひっかかってしまったりする。ところが、Pamela が Mr. B. と結婚するということになると、Peters と Williams の両者は共に、この結婚を祝福するばかりか、Peters は花嫁の引き渡し役を、そして Williams は司式を平気で勤める。<sup>13)</sup> そして、これらの事が、満足し切った Pamela の側から眺められ、少しの問題もなかったかのように

描かれていく。そのため、折角の諷刺的素材が、途中でうやむやにされてしまうので、読者ははぐらかされた印象を覚える。

まるでこの不満を表明するように、JA では、Peters のようなタイプの聖職者に対する批判が徹底しており、それと同時に、聖職そのものに対する弁明も試みられる。先ず、Williams と同じ下級聖職者の Adams は、いかに Lady Booby の命令であれ、筋の通らぬことは断乎拒否する。だから、齢五十になるというのに未だしがない牧師補の地位に甘んじている。また Adams は、Williams が全くの臆病者で、Jewkes のよこした強盗におそわれると、全く無抵抗で相手のなすがままであるのに対し——無論 Don Quixote の影響もあるが——勇猛果敢で、げんこつを揮っても敵と闘おうとする。Peters の方は Adams の上役の教区牧師に重なる。この牧師は Peters より更に悪質で、十分の一税の納入法をめぐって、教区民相手に訴訟ざたを起こしているが、裁判の結果にかかわらず、長びく裁判の費用負担で、貧しい小作人達がつぶれていくのを見ることを楽しみにしているという、およそ聖職者のイメージにそぐわない人物である。

このように Pamela 中の人物と JA 中の人物は色々と重なり、それが自然と Pamela の批判になっている。Mr. B. は当然 Mr. Booby に対応するが、同時に彼は前に述べた Fanny に横恋慕した地主とも重なるし、更に Joseph を誘惑する Lady Booby とも重なる。Jewkes は Slipslop と重なり、Lady Davers の甥 Jackey は Beau Didapper に重なる。長年の勤めで貯えが十分あるにもかかわらず B. 家に戻った弱腰の Longman は、Booby 家の、同じく執事で、金を溜めることを無二の楽しみとして、貧乏人を蔑みながら、この世に貧乏があるなど想像上のたわ言とうそぶく Pounce にやや重なる所がある。

Pamela と JA では上流人の扱い方がまるっきり違う。Pamela では、B. 家の Bedfordshire の屋敷の近所の上流人など、夫人連は Pamela を見ものにするためにこの屋敷を訪れたりするし、旦那連の中には召使いに子を孕ませたりするのもいて、Pamela の評価も最初のうちは香しくない。



Lincolnshire の屋敷でも、Williams から Pamela の救出を頼まれた上流人は誰も取りあおうとせず、Pamela を失望させる。それどころか、中には Mr. B. に連絡して、Pamela 達の計画を水の泡にした者もいる。しかるに、Mr. B. と Pamela の結婚が実際のものになると、彼女によってこれらの人物は至って物分りのよい紳士淑女のように描かれ出す。彼等が彼女を “one of us” (p. 398) と認めたために、彼等の態度が実際に変ったとも言えようが、それにしても、話がきれい事で終わっている。

近隣の者がいともすんなりと Pamela を B. 家の奥方として受け入れると、残る難関は B. 家の縁者、中でも Mr. B. の実姉 Lady Davers であるが、彼女は、丁度弟が自らの階級への pride との葛藤の果てに、つまらぬ pride を克服して Pamela を妻に迎えるのと同様に、最初は強硬に二人の結婚に反対し、Pamela を激しくののしったものの、弟との激しい心理的葛藤の末に、同じく pride を克服し、Pamela を弟の嫁と認める。<sup>14)</sup>そしてそれで問題は全て解決した形になる。

JA では、この甘さをつくように、上流人の階級意識が徹底して問題にされる。そして上流人に限らず、一般に多くの者が、少しでも相手が自分よりも身分が下だと思うと、まるで種 (species) まで違うかのように扱うことに対し、語り手や Adams から厳しい批判がなされる。JA では、人を蔑む言葉として、“*Strange Persons, People one does not know, the Creature, Wretches, Beasts, Brutes*” (II, xiii)<sup>15)</sup> などがあげられるが、Lady Davers などは Pamela をつかまえて、“creature”, “wench” という差別語を連発するし、揚句は “*painted dirt, baby-face, waiting-maid, beggar’s brat, and beggar-born*” (p. 434) とまでののしる。こういう Lady Davers などは JA の観点からすれば、牧師補などは教区牧師の召使い同然と心得る Sir Thomas Booby と Lady Booby の夫妻同様、不屈き千万な差別主義者である。しかし、彼女に対するこの点での批判らしきものは余り目立たず、かえって弟思いの姉の印象が強く表に出る。そして、気性の激しい者同士の二人の激突の中に、どこかうるわしき姉弟愛のよう

なものが漂わされる。

では階級の問題を Pamela がどう考えているかという、彼女は次のような意見を述べる。

... how do these gentry know, that, supposing they could trace back their ancestry for one, two, three, or even five hundred years, that then the original stems of these poor families, though they have not kept such elaborate records of their good-for nothingness, as it often proves, were not still deeper rooted? —And how can they be assured, that one hundred years hence, or two, some of those now despised upstart families may not revel in their estates, while their descendants may be reduced to the others' dunghills! —And, perhaps, such is the vanity, as well as changeableness, of human estates, in *their* turns set up for pride of family, and despise the others! (p. 271)

これは JA 中の次の一節とかなりの類似性が認められる。

Indeed it is sufficiently certain, that he had as many Ancestors, as the best Man living; and perhaps, if we look five or six hundred Years backwards, might be related to some Persons of very great Figure at present, whose Ancestors within half the last Century are buried in as great Obscurity. But suppose for Argument's sake we should admit that he had no Ancestors at all, but had sprung up, according to the modern Phrase, out of a Dunghill, as the *Athenians* pretended they themselves did from the Earth, would not this *Autokopros* have been justly entitled to all the Praise arising from his own Virtues? (I, ii)

両者は共に階級（身分）の不変性を否定し、身分や家柄を誇ることの愚を

説いている。しかしその事とは別に、Pamela が上流社会に憧れて止まないのも事実である。<sup>16)</sup>

Pamela は何につけても *pride* を慎むけれど、Mr. B. によって身分を “raise” 又は “exalt” されたことを非常に意識し、Mr. B. のためにもその身分にふさわしい行動をとろうとする。また身分をあげてもらったことを深く感謝し、それ故に彼を恩人と見なしている。彼女には、自分では気付いていなくとも、身分的に上昇したいという願望が相当前からあったと考えられる。だが、それは彼女にとって、直接階級としてではなく、衣服にかかわることとして意識されている。衣服は階級を象徴しており、<sup>17)</sup> そして彼女は非常に服装を気にかける。

彼女は小間使という一介の奉公人の身でありながら、女主人の寵愛を受け、そのお蔭で読み書き、計算、そして裁縫等の素養を人並み以上に身につけている。彼女はそういうたしなみと同時に、立派な衣服も女主人から授けられて身につけており、同じ召使い仲間から一目おかれて *gentlewoman* 扱いを受け、Mrs. Pamela と呼ばれている。<sup>18)</sup> B. 家から暇を出される時、彼女は自分の所持する衣服を、女主人からもらったものと、女主人が亡くなってから、その息子の Mr. B. の手からもらったもの、それに元々自分が持っていたものと、三つの包みに分類し、前の二つの包みは後に残して自分の家に帰る決意をする。これら三つの包みは、それぞれ、*gentlewoman* の身分、*lady* 又は愛人 (*mistress*) の身分、それから貧乏な田舎娘の身分を象徴的に表わすと考えられる。彼女は諦めて残して帰るつもりで二つの包みに対し、未練は無きにしもあらずであり、まるでこの未練を断ち切る儀式かのように、いち早く田舎娘らしい服に着替えて、回りの者を驚かす。あとで、Mr. B. の妻になってからは、最初のうちはためらっているが、やがて女主人譲りの豪華な衣裳を見事に着こなしてその晴れ姿を披露する。

これと反対に、JA では、Adams の “... Who clothes you with Piety, Meekness, Humility, Charity, Patience, and all the other Christian

Virtues? . . . ” (II, xvii) という比喩表現にも見られるように、徳こそ或る意味で真の衣服である。<sup>19)</sup> そして、作品の中心的な人物は徳をそなえているが故に、服装には余りこだわらない。Adamsなどは色々と騒動に巻き込まれる度ごとに、元々粗末な彼の服は益々みすぼらしくなる一方であるけれど、彼は一向意に介す様子はない。Josephにしても、Booby家から暇を出された後も、仲間から借りたお仕着せをそのまま身につけている。彼が途中で追い剥ぎに裸にされるのは、彼が衣服などに何らの価値も依拠しないことを象徴的に表わす。Fannyにしても同様で、Pamelaのような立派な花嫁衣装は身につけず、床入りで裸になるのが、まさに彼女の美をあらわにすることである。

Pamelaが上流社会に憧れていることは、彼女がWilliamsから求婚されたと聞いた時、彼女の親が願ってもない良縁と喜ぶのに対し、敬虔なChristianであるはずのPamelaの口から、“ . . . of all things I [do] not love a parson.” (pp. 147—48) という意外な言葉が聞かれることによって、ある程度証明される。Pamelaの中には幾度となく“romance”とか“romantic”という語が出てくるが、その大半はMr. B.がPamelaに対して用いたものであり、彼はこれによって、彼女の頭にある彼の誘惑に関する事柄がありもしない事であり、また彼女の貞操観が現実離れしたものだと言いくるめようとしている。しかし、それとは別の意味でなら、“romantic”という語は確かに彼女にあてはまる。彼女は自分の人生を物語のように仕立てあげようとしている向きがあり、“Well, my story would surely furnish out a surprising kind of novel, if it was to be well told.” (p. 258) という彼女の言葉にもそれが弱干うかがわれる。その彼女の結婚に対する夢なら、相手がMr. B.であっても極く自然である。まだ彼女がBedfordshireの屋敷にいた頃、Jervisから、容姿と精神においてPamelaに匹敵する良家の娘がいたら、翌日にでも結婚したいとMr. B.が言ったと聞かされ、彼女が耳まで赤くなるのは、いくらかこのことを暗示している。そういう彼女にとって、牧師の妻になることなど思いもよらぬことなのだ。

Pamela は、Mr. B. にいかに問いつめられても、意中の人など 誰もいないと言う。しかし彼女は、いくら Mr. B. から迫害を受けても彼を憎めないのを不思議に思うようになり、やがてそれが彼に対する愛のせいだと気付く。<sup>20)</sup> しかし、彼女は何故 Mr. B. のような迫害者を愛さなければならないだろうか。<sup>21)</sup> 愛は理屈ではなく、Pamela はそのような愛を扱っているからこそ面白いのだと言えば言えなくもない。Pamela の愛には rake を立ち直らせたいという母性本能のようなものも働いているし、二人の間には masochism や sadism さえ感じられる。<sup>22)</sup> しかし、それとは別に、彼女の胸の奥底には自分でも気付かぬ、上流人になりたいという願望があり、それが Mr. B. への愛と強く結びついていると考えてもおかしくはない。

Pamela は彼女の親と同じく、女の操は命よりも大切だと考えている。それでいながら、彼女自身もいぶかるように、何かと口実をもうけては、Bedfordshire の屋敷を出るのを先に延ばしたり Lincolnshire の屋敷から逃亡する機会をみすみす逃がしている。<sup>23)</sup> ある時などは Lincolnshire の屋敷の門がせっかく開いているのに、外に離してある牛をギョロ目 (“saucer eye”) の悪魔のように思い込んで逡巡する。後に、Lady Davers の許から一目散に走って逃げた時の、Colbrand も驚く俊足ぶりならば、やすやすと逃げられたかもしれないのに。無論、彼女を簡単に逃がさない第一の理由は作者の側の都合である。しかし、Pamela の B. 家への執着も働いていると考えられる。そして、Pamela をこのように B. 家に執着させ、上流社会に憧れさせる一つの明らかな動機が作品の中に見い出される。そしてこれが JA の側から見た一番の問題点になる。

Pamela は女主人の存命中、その家で、貧乏人や病人に対し、主人にかわって施し物をする “almoner” の役目をおおせつかっていた。そして、彼女がこの仕事に無上の喜びを感じていたのは Longman や彼女自身の言葉からも明白である。<sup>24)</sup> これに関連し彼女は “Oh how amiable a thing is doing good! — It is all I envy great folks for.” (p. 11) とか、“O! what a Godlike power is that of doing good! — I envy the rich and the great for noth-

ing else.” (p.329) と言って、上流人への羨望を示す。こうして彼女は、神の如く目下の者に物を施す (dispense) 力 (power) に憧れる。“almoner” の役をしている時は、自分はただの “the second-hand dispenser” (p.384) であったと彼女は思う。そして Mr. B. の妻の座について夢がかなうと、“O how I long to be doing some good!” (p. 400) という具合に、無性に人のために尽したいと思う。そして、これに関連し Mr. B. は “. . . she was my mother’s almoner, and shall be mine, and her own too.” (p.463) と宣言する。しかし彼女は常に驕慢を慎むから、

All the good I can do, is but a poor third-hand good; for my dearest master himself is but the second-hand. God, the all-gracious, the all-good, the all-bountiful, the all-mighty, the all-merciful God, is the first . . . (p. 528)

と控え目である。そして、彼女は自分にこのような力を授けてくれた Mr. B. に対し、“. . . ’Tis to you, dear sir, . . . , next to God, who put it into your generous heart, that all my happiness is owing!” (p. 495) と感謝の意を表し、“the *next* author of my happiness” (p. 327) と彼を称える。そして、神に次いで Mr. B を敬う彼女は結婚後も変わらず彼を master とたてまつる。

Pamela が上流の一員になることを正当化するために、作者が Pamela にわざわざこのような考え方をさせたと思われるが、それが裏目に出ている。細かいことから言えば、彼女を謙虚で礼儀正しく見せるため、彼女をやたら Mr. B. の前に跪かせるが、これは現代の読者を閉口させるばかりではなく、Amelia 中の、“. . . Amelia then fell upon her Knees before her Mother, but the Doctor caught her up saying, “Use that Posture, Child, only to the Almighty;” . . . ” (II,vii) という一節にあるように、Dr. Harrison と同じ考え方をした当時の読者にも大いに気になったことだろう。しかし、これ以上に気になるのが彼女の善に対する考え方である。

作品にあらわれている限りでは、彼女は、善をなすことを力と切り離しては考えられず、そして善行とは単に物や金を施すことだと思っていると知られても仕方ない。これはJAの立場からすると大いに問題がある。

Fieldingの場合、善行は便宜的に二つに分けて考えられる。それは、ある程度恵まれた者が旅人などをもてなしたりする型のもものと、余り恵まれない者が困った者に救いの手を差し伸べる型のものである。そして、いずれにせよ、行為そのものだけでなく、相手に対する同情の念が重んじられる。JAで言えば、Adamsの属する教区の人達は、Booby家の食卓のおこぼれにあずかって助かっているし、Adamsもその台所でビールを御馳走になるのを有難いことと思っている。しかし、Booby夫妻の村人に対する、その人を人とも思わぬ態度を考えると、上のような事実があるからとて、Booby夫妻が善をなしているとは言い難いということが明らかである。二つの型のうちの前者を本当に行うのは、JAではWilsonがその代表である。彼は見知らぬ旅人のAdams達を厚くもてなすと同時に、近隣の恵まれない人を心底から助けている。後者の型の善はAdamsが代表的に行う。彼は旅の途中で、無一文のJosephとなけなしの金を分ち合うし、家に帰ってからも貧しいながらFannyの面倒を見る。食事中に戻って来たFannyに、彼の空腹を心配して、自分の噛りかけの骨付きベーコンを差し出した場面などは、彼の人柄をよく示していて印象的である。このようにJAでは、Pamelaに反論するかの如く、“goodness”は“simplicity”と堅く結びついている。そしてAdamsの場合に限らずそうであり、Adams達が旅をしていて難儀に会う時、彼等に援助の手を差し伸べるのは、Wilsonを除けば、決まってそう恵まれない方の人間である。そしてその典型が、裸のJosephに自分の外套をぬいで貸し与える例の駅馬車の左馬御者(postillion)である。

野心家は善行を権力を求める口実にするようだが、Fieldingの考えでは、“the way to Greatness”と“the way to Goodness”は明らかに異なる。<sup>20)</sup>そして、彼にとってinstructionとは、少しでも多くの読者に後者の道を歩

むように勤めることだった。

JA は、*Shamela* のような種類のパロディとは違って、作品間の相似性が“imitative”というより“allusive”なので、<sup>26)</sup> たとえ *Pamela* を読んでいなくとも十分に鑑賞にたえるが、しかし *Pamela* を頭において読むと、いくつかの部分が一層鮮明に浮かび上ってくる。そして、そのような部分の多くは、間接ながらもまともな *Pamela* の批判になっているのが分る。

Fielding が既に *Shamela* を書きながら、更にまた同じ作品をもじった JA を書いた点に関し、それは Richardson の *Pamela II* が *Shamela* に対する反論として出されたために、Fielding が批判の仕上げとして更に JA を出したという捉え方がある。<sup>27)</sup> しかし、たとえ *Pamela II* が出なかったとしても、Fielding が JA を書いた公算は大であるが、もし Richardson が *Shamela* などに *Pamela II* でまともに答えているというのが本当なら、<sup>28)</sup> その見当違いゆえに、なおさら JA のようなまともな批判になった作品を書く必要があったと言える。Fielding はこうして *Pamela* のアンチテーゼになる JA を書くことによって *Pamela* 批判を完了するとともに、彼独自の世界を打ち建てることに成功したと行うことができよう。

[注]

- 1) この問題は、C. B. Woods, “Fielding and the Authorship of *Shamela*,” *PQ*, XXXV (1946), 248-72 に詳しく論じられている。
- 2) この点に関し、Robert Etheridge Moore は, “Certainly neither book [neither *shamela* nor *Joseph Andrews*] ever affected the sincere devotion of the multitude who read *Pamela*.” (“Dr. Johnson on Fielding and Richardson,” *PMLA*, LXVI [1951], 167) と言っている。
- 3) これに関連し、John Carroll は, “. . . Richardson anticipated possible objections by placing them in the novels.” (Introduction to *Samuel Richardson: A Collection of Critical Essays*, ed. John Carroll [Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1969], p. 4) と言う。
- 4) 本論の *Pamela* からの引用は The Norton Library Edition による。なお、このテキストでは Mr. B. は Mr. B— となっているが、本論では一般に合わせて Mr. B. の形を用いた。
- 5) Rosemary Cowler は “Pamela’s morality may be limited to a rather shallow prudence and her insight may be naive, the product of a narrow ethic, but to attribute this to conscious hypocrisy and present her as a designing slut, as Fielding did, was to distort the original grotesquely



if, for the moment, amusingly.” (Introduction to *Twentieth Century Interpretations of Pamela*, ed. Rosemary Cowler [Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1969], p. 8) と述べている。

- 6) よりまともな批判としては、Clara Linklater Thomson, *Samuel Richardson: A Biographical and Critical Study* (London: Horace Marshall & Son, 1900), pp. 156ff. が偽善とは別の点での Pamela のうとましい面をうまくまとめている。
- 7) *Pamela* における “trial” の意味については、Albert M. Lyles, “Pamela’s Trials,” *Twentieth Century Interpretations of Pamela*, pp. 103-105 参照。
- 8) Margaret Anne Doody は、*Pamela* を、その幸福な結末から一応喜劇と見るけれど、その暗さ、悲劇的含みゆえに、単なる喜劇ではないと言う (*A Natural Passion: A Study of the Novels of Samuel Richardson* [Oxford: The Clarendon Press, 1974], p. 35)。
- 9) しかし、Pamela は新興中産階級を代表すると一般的に捉えられる。
- 10) Cynthia Griffin Wolff も、“...[Pamela] adapts to her new life, is accepted by her former adversaries, with an ease and grace that belie the anguish of her trial.” (*Samuel Richardson and the Eighteenth-Century Puritan Character* [Hamden: The Shoe String Press, 1972], p. 72) と言って、この点を問題にしている。
- 11) Pamela も読書について、“...from these I hope to receive improvement, as well as amusement.” (p. 114) と言う。
- 12) 読者が Pamelists と anti-Pamelists に分かれるのは、第一に主人公 Pamela の人格に対する評価によるが、それに次いで Mr. B. の評価による。本論は、Fielding の立場から Mr. B. を許すべからざる男と見ているが、これとは対照的に Richardson の意図にそって Mr. B. を弁護し、それに基づいて作品自体の高い評価を行っているのが、Gwendolyn B. Needham, “Richardson’s Characterization of Mr. B. and Double Purpose in *Pamela*,” *ECS*, III (1970), 433-474 である。
- 13) Adams は、Joseph と Fanny の結婚に際し、やや形式的に過ぎると思える程、結婚予告 (banns) をへた式にこだわる。しかし、Pamela 達の結婚の仕方を見ると、成程と思わされる所がある。

Mr. B. は、結婚許可証を得ることによって、自分の屋敷内の礼拝堂で、極く小人数の立ち会いのもとで秘密裏に式をあげる。Pamela は最初かすかに偽装結婚 (sham-marriage) の不安を持たない訳でもないが (sham-marriage もしくは mock-marriage については、Ian Watt, *The Rise of the Novel* [London: Chatto & Windus, 1967], pp. 149-50; Alan D. McKillop, “The Mock-Marriage Device in *Pamela*,” *PQ*, XXVI [1947], 285-88 参照)、この段階では Mr. B. にかけてしまっている。近隣の上流人には結婚の意図が知らされているし、Williams や Peters が立ち会っているから大丈夫だと言えば言えなくもないが、彼等の Mr. B. に対するだらしなさを思うとやはり一抹の不安がある (Cf. Gerald Levin, *Richardson the Novelist The Psychological Patterns* [Amsterdam: Rodopi, 1978], p. 31)。それに両親を式に立ち合わせないのもおかしい (Bernard Kreissman が *Pamela-Shamela* [University of Nebraska Press, 1960], p. 10 で、“...with her father in attendance, the marriage is truly performed by Parson Williams...” と言っているのは明らかに勘違

いである)。これに対し、Joseph と Fanny は教会で、身内の者をはじめ、大勢に見守られながら、公然たる式を挙げる。この辺りも、やはり Pamela の批判になっているように思われる。

- 14) 現代の読者にとっては、前半の誘惑の場面よりも、むしろ後半の Pamela と Lady Davers,そして Mr. B. と Lady Davers との対決の場面が、ずっと迫力があって面白いかもしれない。前者については、B. F. Brissenden は “. . . the most impressive scene in Pamela is one in which Mr. B. does not appear; it is quarrel between Pamela and Mr. B.'s sister, Lady Davers.” (“Pamela,” Samuel Richardson [London: Longmans, Green and Co., 1958], p. 19; *Twentieth Century Interpretations of Pamela*, p. 56) と言っているし、Margaret Anne Doody は, “The scene with Lady Davers is one of the most vividly dramatic in the whole story. . .” (*op. cit.*, p. 65) と言っている。後者については、B. L. Reid が, “. . . it is one of the best things in the book, and one of the truest.” (*Twentieth Century Interpretations of Pamela*, p. 40) と評価している。
- 15) *Joseph Andrews* と *Amelia* からの引用は Wesleyan Edition による。
- 16) Pamela のこのような姿勢に関連し、William Park は “In mid-eighteenth century novels generally, it is the sign of villainy or affectation to wish to rise.” (“Fielding and Richardson,” *PMLA*, LXXXI [1966], 387) と言うが、William M. Sale, Jr. は “[Richardson's] taste for aristocracy, like that of his heroines, is an index of his need to make common cause with a superior social class.” (“From Pamela to Clarissa,” *The Age of Johnson*, ed. F. W. Hilles [New Haven: Yale U. P., 1949], p. 132) と言って、Pamela のような姿勢を snobbery とする見方を斥け、積極的な評価を下している。
- 17) Carey McKintosh は、*Pamela* において衣服は身分の他に性を表わすという。なお、彼は “symbol” という語のかわりに “leitmotif” という語を使う。See Carey McKintosh, “Pamela's Clothes,” *Twentieth Century Interpretations of Pamela*, pp. 89-96.
- 18) “. . . Pray, Mrs. Jervis, are we to lose Mrs. Pamela? as they always call me. . .” (*Pamela*, p. 44).
- 19) Cf. “Fie, Mr. Andrews!” said [Mr. B.], “I thought you knew that the outward appearance was nothing. I wish I had as good a habit inwardly as you have.” (p. 329).
- 20) Elizabeth Bergen Brophy は、Pamela が Mr. B. に恋心を抱いているのは最初から明らかで、彼女がこの内心の誘惑者と闘う所に大きな意味があるという (*Samuel Richardson: The Triumph of Craft* [Knoxville: The University of Tennessee Press, 1974], pp. 68-71)。Pamela の Mr. B. に対する愛を “desire” (“libido”) と捉え、彼女は 根本的には良心と欲望の板ばさみになっていると考えるのが、Stuart Wilson, “Richardson's Pamela: An Interpretation,” *PMLA*, LXXXVIII (1973), 79-91 であり、この性的シンボルに基づく解釈を更に推し進めているのが、Terry J. Castle, “P/B: Pamela as Sexual Fiction,” *SEL*, XXII (1982), 469-89 である。
- 21) Pamela が Mr. B. への愛ゆえに彼と結婚することについて、Austin Dobson

- は “We could perhaps forgive her for admiring her master; but in the circumstances which ensue, it is impossible to forgive her for becoming his wife.” (*Samuel Richardson*, [Detroit: Gale, 1968], p.34) と言うし, E. B. Brophy は “How can she bring herself to marry the cad who has been making these vile attempts? A major difficulty for the modern reader is undoubtedly the personality of Mr. B. He is so insufferably self-satisfied and so intellectually mediocre that marriage to him seems more punishment than reward.” (*op. cit.*, pp.64-65) と言う。
- 22) Mr. B. の “. . .we have sufficiently tortured one another. . .” (p.280) という言葉は、この関係をよく言い表わしている。Richardson の作品における sadism 等については、Morris Golden, *Richardson's Characters* (The University of Michigan Press, 1963), pp.6-12 参照。
- 23) Robert Alan Donavan は Pamela が逃げない理由として, “. . .if her objective is to maintain and consolidate her social status, then to withdraw would be a confession of defeat; it would not only annihilate everything she has gained. . ., it would deprive her of her very class identity.” (*The Shaping Vision* [New York: Cornell University Press, 1966], pp.57-8) と述べている。
- 24) “. . .I have seen the pleasure you used to take to dispense my late lady's alms and donations.” (p.494) / “There is something so satisfactory and pleasing to reflect on the being able to administer comfort and relief to those who stand in need of it, as infinitely, of itself, rewards the beneficent mind. And how often have I experienced this in my good lady's time, though but the second-hand dispenser of her benefits to the poor and sickly, when she made me her almoner!” (p.384).  
 善いことをすることに喜びを感じずという点では、Richardson の倫理観は Puritanism のそれとは異なると Mark Kinkead-Weekes は言う (*Samuel Richardson: Dramatic Novelist* [London: Methuen, 1973], p.12)。
- 25) *A Journey from This World to the Next, &c., Works*, ed. W. E. Henley, XVI, 234.
- 26) Martin C. Battestin, *The Moral Basis of Fielding's Art: A Study of Joseph Andrews* (Middletown: Wesleyan U. P., 1959), p.8.
- 27) See Douglas Brooks, “Richardson's *Pamela* and Fielding's *Joseph Andrews*, *EC*, XVII (1967), pp.158-68.
- 28) Owen Jenkins は, “. . .Richardson's continuation of *Pamela* demonstrates that Fielding's parody was so easily answered that the pertinent question is the wisdom of Richardson's taking it as seriously as he did!” (“Richardson's *Pamela* and Fielding's “Vile Forgeries,” *PQ*, XLIV (1965), 201) と述べる。